

G-8 大学家政学部と高校家庭科との関連に関する調査研究(第2報)  
大妻女大家政 ○大竹智恵子 仙波 千代

目的 大学家政学部と高校家庭科との関連について、第26回学会において発表し、高校家庭科の履修状況の差や大学家政学部選択理由の多様化に伴い、大学での指導性や教育内容のあり方についての問題点を認識したが、今回は特に、高校での履修単位数の異なる普通科出身の学生と家政科・被服科出身の学生を対象として、被服技術に関する意識の違いを明らかにし、今後の大学における被服教育のあり方を検討することを目的とした。

方法 i)調査対象は、大妻女子大学被服学科学生3・4年生133名である。 ii)調査の方法は、④高校家庭科の履修状況、①被服学科選択の理由、⑦大学における被服実習、②将来の進路などに関する項目について調査を行った。 iii)調査期日は、昭和51年5月。

結果 下記のことについて認識することができた。

- ①. 高校家庭科の履修状況は、普通科出身学生の59.5%は「家庭一般」1か履修してからず、中でも、被服製作に関することを全く履修してきていない者が11%いた。
- ②. 被服学科選択理由についても、普通科出身学生と家政科・被服科出身学生との間に意識の差がみられた。
- ③. 大学での被服実習については、技術の程度、実習時間数、施設・設備に関する項目について両者間に差がみられた。
- ④. 被服の専門知識や技術を将来にどのように生かすかについては、3・4年の学年の差とともに、普通科出身学生と職業科出身学生との間に職業選択に対する志向の差がみられた。